源治一家物語

篤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
源治一家物語

【Ｎコード】
Ｎ７３７５Ｅ

【作者名】
篤

【あらすじ】
治安の悪化に悩む小藩での治安回復のアイデアとは江戸時代のプロジェクトＸかも

（前書き）

小藩の三里藩では治安の悪化が何よりの問題であった。町奉行と言っても予算もないし、部下はたった二人である。奉行はこの問題に日々頭を悩ませていた。

三里藩では治安の悪化が緊急の課題であった。
奉行所に人がいれば良いのであるが侍の数は限られており経費をかけることも出来ない。
町奉行澤田真之介は思案に暮れていた。人は部下の同心が二人だけである。
大店や大家集を集めて思案を聞いてみた。
「このままでは、店の万引きや、ならず者のケンカなど治安が悪くなって困る。何か良い知恵はないものか。」
と奉行が話を切り出しても何の返事も頭を抱えるだけで何の返事も帰ってこない。
町奉行と言っても、牢屋が一つあるだけの小さな役場であった。役人は奉行一人に同心が2名だけである。
「店ではどのようにしておる。」
「へえ、腕っぷしのいい若い者を何人か雇っておりますが。おかげさまで店で悪さをするようなことはありません。」
鶴屋の店主が答える。
「へえ私どもの店も用心棒みたいなものを雇いっておりますが、掛かりが結構馬鹿になりません。」
どの大店でも治安が悪いので用心棒みたいなものを雇っているようであったがその費用が結構かかって様であった。
「すみやせん」後ろの方で声がした。
高利貸しの伝衛門であった。
「あっしのところの若い衆も荒くれが何人かおりやすが、良かったら使ってもらっても結構です。」
「おぬしのところの若いもんと言えばどっちが悪さをするかわからん様な荒くれではないか」
「いいえ商売で、悪そうな顔をしてはおりますが、根は真面目な若

者たちでっせ」
一同からどっと笑いが起こる、当時は違法ではなかったが金貸しと言えば今のサラ金のようなものである。すなわちサラ金の取り立てに使う若い者を町の取り締まりに使えないかと提案したのであったが、一同から一笑に付されることになった。
高利貸しの伝衛門はむっとした顔をしたが、高利貸しのイメージは今も昔も大して変わらないのであった。
しかし、町奉行澤田真之介はこのときなぜか何かが解決したような気がした。
その日の会合はそれで終わった。
何も成果がなかったが多くの店では店の周りの治安を維持するために何名かの荒くれ男を雇って警備にあたっており、その費用が決して少ないないことだけは分かった。町の治安のために人を配置して懸ければ治安が良くなるのは素人でも分かるがなにぶん貧乏な三里藩ではその費用がどうしても出てこない。
真之介は大店の中でも一番信用がおける呉服屋の堺屋兵左衛門を自宅に呼んだ。
「今宵呼んだのは他でもない、町の治安を納める方策を思いついたのでな。一つ相談に乗ってもらいたい。」
「へえ、何なりと相談には乗りますが、お足のかかることだけはご勘弁を願い問うございます。」

「実はな、悪党の集団を作ってもらいたいのよ。」
「悪党の集団をですかい？」
「そうよ、悪党を治めるには悪党に任せるに限るってことよ」
「あっしがその悪党の元締めをするんですかい。冗談いっちゃ怒りますよ、あっしは悪党の元締めが出来るほどの悪党じゃござんせん。」
「分かっている、その方は悪の総元締めを裏で操れば良いまでのこと。その方が総元締めであることはわししか知らないことと思って

おいてくれ。」
「してその総元締めを誰にさせるつもり何ですかい。」
「そこよ、こうしちゃあどうだろう？大店が集まって、見回り組を組織する。その見回り組にかく店から人を出すか金を出すかしてもらう。そのかく店が出した連中の中から元締めを一人決めさせるってのはどうだろう。」
「どうやって決めるんですかい。」
「見回り組に集まる悪党どもの中から自分たちで決めさせると済むことよ。」
「ケンカになりますぜ。」
「ケンカ大いに結構腕っぷしの強いやつが大将になっても根回しがうまいやつが大将になってもいっこうにかまわない。どうじゃ。」
「そいつはおもしろそうですな、すなわちあっしがその見回り組を集めて寄り合いみたいなものを作れば良いわけですね。」
「さすがに堺屋話が早い、その方が中心になってその見回り組を作ってくれ。」

その三日後堺屋の広間に各大店の用心棒が集められた。
「三里の町のために見回り組を結成する。その元締めは人を雇い、町の治安を守ること。
そのための金子は各店から売上高に対して1分（1％）の金を出してもらうことでその費用とする。その運用はすべて元締めに任せる。」
一同は驚いた、悪党と呼ばれているものが見回り組として立派に認められるのである。
高利貸しの取り立てを生業にしていた。源治はこのときをチャンスだと感じた、このままのただのごろつきで終わるのでなく見回り組の頭領として名をあげたいと思った。
まずは同業の5人に声をかけ源治一家として名のりをあげた。同業の5人は兄弟分として源治一家で町のごろつきに声をかけた。中に

は断るものも何人かいたが、ケンカはお手の物の６人である。決して負けることはなかった。
「てめえ、源治一家にたてつくつもりか。」
「源治一家？なんだいそりゃ、ちゃんちゃらおかしいぜ。」
「何をこの、あめえ見回り組に入れられねえぜ」
「あんたが何を言っても見回り組はうちの大将に決まっているのよ。すこんでろ」
「なにやってしまえ。」
源治の舎弟利助は得意の木刀で相手の肩に思い切り打ち据えた。その後も足腹などをぼこぼこに打ち据えられた。
いつしか見回り組は源治が仕切ることに決まっていたようである。
堺屋の前に現れた源治はまず支度金の３０両を渡された。源治はその金の少なさに驚いた。
「だんな、いくら何でも一家を構えて２０人からの若い者を食わせていくのに金が足りませんぜ」
「しかしのどの店からでも売上金の１分を出させたらそれだけの金子しか集まらなかったのよ。」
「しかし、だんなあのときは一分って言いやしたでしょう。」
「確かにそう言ったんだがどこの大店も不景気でそれが一分だそうだ。しかし、店主の言うことを信用できませんとは言えまい。確かにその金ではもうけは少なかろう、そこでじゃ、一つ思案があるのじゃがどうじゃ」
「これまでご禁制の賭博をお主らでやってはどうじゃ、お主らが賭場を開帳してその上がりを一家のまかないにすれば良かろう。」
「町中で賭場なんか開けるところがありますかい。」
「町はずれに良い土地があるそこに一家を構えて賭場を作ったらどうじゃ」
「しかしそんなことをして捕まりやせんかい。」
「お主らが町の治安を守っている限りは、奉行様もお主らを捕まえるようなことはせんじゃろう。しかし、お主たちの博打はあくまで

寄り合い衆の中での慰みもので押さえておけ、貧しい民から大金を取り上げるようなことがあったら、その時は奉行様のお縄をちょうだいすることになる。よいな。」
「へえ、しかし、その博打ってやつは儲かるのですかい。」
「儲かるに決まっておる、博打の胴元でつぶれたやつは一人もいない。」
「どうやったら儲かるんですかい。」
「簡単なことよ、知ってのとおり丁、と半があるよな」
「へい、でもそれだけじゃ儲からないでしょう。」
「あたりまえよ、そこにピンゾロという役を作る。これは5倍になる。」
「丁と半だけに懸けていればピンゾロで全て巻き上げられると言うわけだ。しかし、ピンゾロに懸けていれば6回に一回しかでないから5倍の掛け金をもらっても結局損をする。すなわちピンゾロがでれば胴元が儲かる仕組みになっておる。どうじゃ。」
「へえ賭場の仕組みはそんなになっていたのですか。知りませんでした。」
「できればそこに綺麗所を集めて飲み屋を開くもっと儲かるぞ。」
「飲む・打つ・買うが一度に出来る天国のようなところよ、どうじゃ博打に買った客は懐が温かいので女に金を使うという訳よ。」
「さすがに堺屋の旦那すばらしいお知恵で。」
「それにな、博打で遊ばれる旦那集の店だけはどんなことをして守ってやれ。旦那集が儲けないことにはこの商売は決して儲からないと心得な。」
かくして源治一家が三里の町を治めることにあいなった。町の中で悪さを働く者は源治一家の子分がにらみを効かせることになった。各大店は時より博打を打って遊ぶことで源治一家にかなりの大金を納めることになる。また、ケンカの仲裁、旦那集の妾の世話や女郎屋の警護や金貸しの金の取り立てまで源治一家の仕事にはキリがない。

しかし源治一家も所詮は悪党の親玉である。不良じみた若者が町の真面目な青年からカツ上げする事件が起こった。このことから源治一家の評判が非常に落ちることになった。
町人の間で
「やはり源治一家なんて悪党の集まりよ、あんな連中に町の治安なんて任せられる者か」
「奉行はいったい何をやっているんだ。」と奉行の評判が地に落ちた。
町奉行澤田真之介はすぐに動いた。源氏一家の博打の現場に踏み込んで全ての金、博打の道具を押収した。
もちろん元締めの源治はその場で逮捕であった。同心又左右衛門は源治を取調室に呼んだ。
「源治その方何か勘違いをしているんじゃないかい、その方たちの仕事は町の治安を守ることだぜ、それを不良にカツ上げさせて何やってるんでぃ。」
「へいまことに申し訳ないと思っておりやす。」
「良いかそのほう達、源治一家とは悪党の中の大名のようなものじゃ。」
「町の治安が悪くなると、大名家が取りつぶしになるように、その方たち一家も取りつぶす。取りつぶすのは簡単よ代わりになる悪党の一家をこしらえてケンカさせる、捕まえるのは源治一家だけってすんぽうよ。」
「えーーっそれは決してご勘弁を」
「そこでじゃ、お主らは悪党のまとめ役として、一家にたてつくやつや町で悪さをするやつは徹底的に懲らしめるんだ。それがおめえらの仕事よ、おまえらの生業は庶民の楽しみの賭場の上がりで十分であろう。そのほかにも高利貸しの取り立てもやっておろうが。」
「今日、押収した博打の金から１０両をその方にやる。この金を使って町の取り締まりに全力でかかれ。いいな。それから以後１ヶ月賭場を開くことを禁止する。その間に市中の取り締まりを徹底的に

やるんだ。」
「へへーい。ありがたきお裁きで。」
「それともう一つ、今度のカツ上げは博打の元手が欲しくてやったとのことだ。」
「旦那集の遊びに、若い兄ちゃんは簡単には入れないだろうが。それでカツ上げをしたそうだ、どうするよ」
「いやーそれは、どうすればいいんで。」
「若い兄ちゃんでも小遣いで遊べるような賭場を作るのよ。今度の博打禁止の期間の間にそんな誰でも一銭からでも遊べるような賭場を作ってやりな。言っとくけどその賭場は儲けようと思っちゃいけないぜ。もうけは飲み代と女代ぐらいにしておきな。」
「くれぐれも言っておくが町の治安を守るのがおまえらの仕事。わしらは治安が悪くなったときに、おまえらをこうして捕まえて獄門にさらす。今度だけは勘弁してやる。この次こんな事件が起きれば貴様らの一家のうち一人を打ち首にする。よいな」
その日のうちから源治一家の徹底的な見回りが始まった。また目明かしとして堺屋の推薦で一人の物が奉行所に出向くことになった。すなわち奉行と源治一家の間の間者と言うわけである。
目明かしは見回りと称して賭場の出入りが自由である。
見回る度に毎日の所場代を目明かしに預けるのである。その金は奉行所の裏金になる。賭場の情報をしっかり握っているので悪さをしそうな連中はすぐに三里一家が脅しをかけて不良にならないようにし向けるのである。それでもどうしようもない不良を三里一家に子分にするか、半殺しにすることで町の治安は十分に保たれた。
この町では大店の主人は寄り合いと称して賭場で博打を打つことが暗黙の決まり事であった。大店の店主は博打で勝つことが目的でなく負けることで店の見回りの費用を負担するのであった。博打もしないような店主は村八分にされて商売が出来ないことも往々にしてあることであった。
またこんな町でも、泥棒や殺人などの事件がたまにはあるが、操作

するのは源治一家のネットワークが中心である。もし事件を解決できないとまた賭場が中止になり誰かが獄門につながれることになるので必死である。
また犯罪の被害者や火事の被害者には源治一家から見舞金を出すことが通例になっていた。
三里藩と源治一家の間柄は以後１００年以上続いたが、奉行と源治一家の間に密約が合ったことを知っている物はいない。また明治の世の中今現在と時代が変わるにつれて源治一家の呼び名も変わっていきその由来を知る者は誰もいない。
また明治維新の時には奉行所の裏金で多くの武士が救われたのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7375e/

源治一家物語

2011年1月21日14時14分発行